



シリーズ! 活躍する2023年度日本ITU協会賞奨励賞受賞者 その3

すずき ゆうじ
鈴木 悠司

株式会社NTTドコモ 6G-IOWN推進部
yuuji.suzuki.rm@nttdocomo.com
<https://www.docomo.ne.jp/>



ITUで定義されたIMT-2020 (5G) を実現するために、3GPPにおいてエンドユーザ自身によるQoS変更などのユースケースを想定した機能であるRel-18 SNAAPPのラポータとして議論を牽引し、技術報告書及びStage2仕様の策定に貢献。加えてMEC (マルチアクセスエッジコンピューティング) などで用いられるサービスネイブラ方式等を積極的に提案・寄与している。

モバイルネットワークと多様なアプリケーションの連携に向けた取り組み

この度は日本ITU協会賞奨励賞という名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。日本ITU協会の皆様と、これまでの活動へのご指導とご協力をいただきました3GPP SA6やNTTドコモの皆様、そして多くの関係者の皆様にご場を借りて厚くお礼申し上げます。

私は2020年より3GPP SA6に参加しました。SA6は2014年の発足当初より、ミッションクリティカル関係のワーキンググループとして活動してきました。5Gの初期仕様策定と同時期のRelease15以降は、3GPPが提供するAPIのフレームワークであるCAPIF (Common API Framework) や、各種産業用アプリケーションが共通的に利用する機能を提供するSEAL (Service Enabler Architecture Layer) をはじめ、3GPPネットワークと外部のアプリケーションとの連携強化に向けたソリューションの検討も担っています。

その中で私は、API呼び出しの認可方式を拡張するSNAAPPというワークアイテムのラポータとして、標準化議論を牽引する機会をいただきました。ワークアイテムの提案から始まり、コンセプトに賛同する仲間集め、課題の明確

化、解決策の技術的な議論など、各国の標準化担当者と合意を形成することは簡単ではありませんでしたが、困難に直面する度に周囲の皆様にお力添えをいただき、2023年5月、ドイツ・ベルリンでのSA6#55会合にて、無事にワークアイテムを完了することができました。この取組みで仕様化した技術により、ユーザが自身の通信に影響するAPI利用の可否を細かく管理できるようになり、API活用の安全性・利便性が向上することを期待しています。

また、SA6の中でも特に重要なトピックとなっているEDGEAPPの仕様化についても力を入れてきました。これはエッジコンピューティングを実現するためのアプリケーションネイブラを規定するトピックであり、Release18ではこれまでの基礎仕様に加え、異なる通信事業者のエリア内にいる場合のローミングの扱いや、複数のエッジコンピューティングサービスプロバイダが連携してサービスを提供するフェデレーションなど、様々な拡張を提案・議論してきました。

今後も標準化活動のみならず、様々な切り口で情報通信分野の発展に寄与できるよう、努力をまいります。

やまぐち さとし
山口 智史

富士通株式会社 先端技術開発本部 6Gインフラ戦略企画統括部
yamaguchi.sa-00@fujitsu.com
<https://global.fujitsu/ja-jp/>



北米6Gのプレスタンダード活動を実施しているNext G Allianceに参画、グローバル6G検討議論の推進を実施し、3件の寄書提案が採択された。北米6Gプレスタンダード活動の内容をTTCセミナーでの講演を通じて日本国内に還元。今後、グローバルにおける標準化活動への寄与が大きく期待される人材である。

6G標準化に向けて

この度は日本ITU協会賞奨励賞という身に余る賞を頂き、大変恐縮でございます。日本ITU協会の皆様及び日々ご指導とご協力をいただいている関係者の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

私は、2022年3月より、北米を先導して6G検討を実施しているNext G Allianceの会合に出席しております。以前はローカル5Gビジネスにシステムエンジニアとして携わっておりましたが、当時、富士通が数少ない日本企業の一つとしてNext G Allianceに本格的に参画するにあたり、「ぜひ6G検討の一助となる活動がしたく、ここに従事させていただきたい」と手を挙げたのが本活動従事の経緯となります。

Next G Allianceは、“政府連携のもとでの民間主導の取組みを通じて、今後10年間で北米ワイヤレス技術のリーダーシップを向上させる”ことを目的としており、現在は6Gロードマップ策定/改訂や各種ホワイトペーパー作成に力を入れています。私はこの動きに対して、富士通として何らかの貢献ができるのではないかと、そしてこのNext G Allianceでの活動で得た学びを日本国内に還元することができるのではないかと考えました。

貢献に関して、Next G Allianceのホワイトペーパーにおいて、日本で議論されているトピック“ディスアグリゲータッドアーキテクチャにおけるオーケストレーション”の提案をし、End to end、オープン化、管理機能観点での内容を盛り込むことができました。暗中模索しながら活動を進めていたため苦しい時期もありましたが、結果的に主に効果的であったのは、①議論内容に対しての知見構築、②議

論への意見出し、の2点に関しての工夫です。①については、自分自身の知識の範囲内ではカバーできないことが多かったため、日々社内情報発信に力を入れることで有識者を巻き込みました。本件を通して、周りを巻き込ませていただくことの重要性を痛感いたしました。②については、2022年5月に米国オースティンで開催された6G Summitという6G検討のイベントに現地参加し、Next G Allianceのキーパーソンと対面で話すことで私自身を認知してもらいかつコミュニティの雰囲気を感じ取ることで心理的ハードルを下げ、突破口を見いだしました。一方で、この②に関しては、特に英語力という面で現在も苦労が継続しているというのが正直なところであり、Eメールや共同編集ファイル等での文字ベースの意見出しの場を有効活用しております。

日本国内への還元に関しては、Next G Allianceでの活動を通して得た学びを一般社団法人情報通信技術委員会(TTC)主催の公開セミナーにて発表をさせていただきました。本発表では活発な質疑応答を行うことができ、Next G Allianceでの活動が多くの関心を持っていただける内容であると気づきを得ました。

現在は社内での6G講演やワークショップの開催にも力を入れつつ、継続してNext G Allianceの会合に出席し、IMT-2030 Framework新勧告案を受けての具体的な要件検討をするべく議論参加をしております。

今後は、より社内外を巻き込み、北米Next G Allianceや日本の標準化関連団体を通じて6G標準化に直接の貢献ができるよう、尽力をまいります。